【登場人物】

・ロバート・クロス
主人公。貧民街の出身だったが、自身の美貌を使い売春で次第にのし上がっていく。

・イーサン・カーター
ロバートに育てられた少年。運動神経がよく射撃と手芸が得意。暗殺業を始める。勉強はすこぶる苦手。

・アン
ロバートが恋する女性。ブラフマー街の貧しい娼婦。

・アーノルド・リズリー
ヴァルナ社の社長。ロバートに性的奉仕をさせている。

・ジェフェリー・ボールドウィン
リズリーの側近。ロバートのお目付け役。

・アレック・バルダーソン
ロバートの友人。ロマンチストで作詩が得意。

・ジョン・ヘイスティングス
ロバートの友人。やんちゃな性格。

・パトリック・オーウェル
ロバートの友人。教会の一人息子。優しく面倒見がいい。

・グレース・マクファーレン
没落貴族の令嬢。気位の高い美少女でロバートやリズリーを毛嫌いする。

【重要用語】

・シヴァ街
ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。現在、ロバートとイーサンが暮らす。

・ヴィシュヌ街
三区分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。

・ブラフマー街
ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンの出身地。

・ヴァルナ社
ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。

【前回の粗筋】

貧しい生まれのロバートは、恋人のアンやたった一人の家族のイーサンにむくいようと、ネオンライトタウンのトップを目指して奮闘する。

世話をしてもらったマフィアのボスの妻の、高額な治療費の代わりにロバートはヴァルナ社の社長に買われるが、そこでは今まで思いもよらなかった贅沢な毎日が待っていた。しかし、リズリーはロバートに自立を許さず、そのことにロバートはいらだつ。ある日、気高い令嬢のグレースに出会ったことで、ロバートは彼女に追いつくために猛勉強を始める。知識や礼儀作法を身に着けるため努力する中、ロバートはジョン、アレック、パトリックという三人の友人と出会う。

努力の傍ら彼らと楽しいひと時を過ごすうちに、第一次世界大戦が勃発する。友人たちが胸をときめかせる中、ロバートはヴァルナ社の鉄鋼を参戦国に売って儲けるという計画を思いつく。これぞ好機と言わんばかりに彼はリズリーに計画を提案するが、あっさりと却下されてしまう。失望の中、戦争はどんどん過激化していく。

ある日、イーサンがリズリーに強姦される、という事件が起きる。イーサンを傷つけられたロバートはリズリーへの憎しみを募らせ、リズリーの殺害を決意する。

ブルーアイズヒーロー4

オーヴァー・ゼア

作：こだま
挿絵：市川司幸

あの一件から俺はイーサンを個室に一人でいさせないように気を付けた。寝るときも彼と同じ年くらいの給仕が寝泊まりする大部屋にいかせたし、他ではできるだけ誰かと行動させた。

俺はあの時からリズリーに明確な憎悪を抱くようになった。事あるごとに寝台の上で茫然として震えていたイーサンが思い出されて、夜の務めの後に無防備になるやつの背中に、何度ペーパーナイフを突き立ててやりたい、と思ったことか。それでも嫌悪を丸出しにしては元も子もないので、必死に従順な様子を演じ続けた。そうして虎視眈々とチャンスを狙い続けた。

本当はでも……もしかしたら……。いや、やめよう。もう泣くのはたくさん。

あれから私は何とかリズリー氏の後、この会社の長になるために策を巡らせ、遺言書を偽造することを思いついた。幸い、リズリー氏はまだ後継者を決めておらず、独身で子供もいなかった。こちらとしては、彼の孤独は非常にありがたかった。

すぐに弁護士を一人やり込めて、偽の遺言書を作成させた。後継者の記名欄には、しっかりと私の名前を記させた。リズリー氏自身の署名は、彼が泥酔したときにどさくさに紛れていただいた。

これで書面の準備は整った。後はリズリー氏が死ねばいいのだ。

ところが、それですんなり殺してしまうわけにはいかない。何かしらの殺人痕が残れば遺言書の中身が偽造だとバレてしまう。ならばどうする？　私の頭では完全犯罪など思いつけない。自然に息が止まるのを待つしかないのだ。こんな望みの薄い計画が、私の思いついた最上策だった。最上とは言っても、すがる策がその一つしかなかった。

さあ、来い。死んでしまえ。

私の膝でうとうと微睡むイーサンを眺めながら、ありとあらゆる神様に祈った。人の不幸を聞き入れてくれる神様などいるかどうか分からなかったが、それでもやはり、細い糸の端さえ大木だった。

リズリー氏が正式に後継者を決めてしまえば何もかもがお終いだ。その前に私に運が向いてくれなければならない。

イーサンを気遣い、友達には何でもないような顔をし続け、今にすべてが終わってしまうのではないかとひやひやしながら日々を過ごし、年は一九一五年になった。

そうこうするうちに戦争が終了してしまわないかと心配になったが、その点に関しては大丈夫だった。「クリスマスまでには終わる」と信じられていた戦争は、ヴェルダンの攻防戦からますます激化し、一向に植わる気配がなかった。それにも関わらず、リズリー氏は一向に貿易に乗り出そうとはせず、それが一層私を苛立たせた。

ところが。なんの偶然なのか、幸運なのか。いや、もっと他のものなのか。私の向こう見ずな計画はある日突然成就してしまったのだ。それはあまりにも急で、一瞬立ち止まって迷う暇もないほどだった。

あれは夜更けだった。二時過ぎの私の寝室。私は夜の仕事を終えて、寝台を降りてガウンを着ていた。リズリー氏はシーツの上で煙草を吸ってくつろいでいた。汗をかいたので、ひどく喉が渇いて酒の味が恋しくなった。壁に取り付けられた戸棚から酒瓶を取り出そうと、椅子を引きずってきてその上に乗った。

リズリー氏が呻いたのはその時だった。彼の喉の奥から水が逆流するようなゴポゴポという音がして、私は椅子の上で振り返った。

「どうなさったんですか、旦那様」

そうお義理程度に言うと、再び酒瓶探索に取り掛かった。

次のリズリー氏の声はほとんど悲鳴に近かった。驚いて振り返ると、彼は胸を押さえて寝台から転げ落ちた。

頭皮が引きつり、冷感が走った。眼球の水分が一気に蒸発したように感じた。

リズリー氏は頭部を切断された芋虫のよろしく、床の上でびちびちと跳ね回り、やがて全身で私の方へ這い寄ってきた。その気色悪い赤ん坊のような動きを見て、私は驚愕と恐怖で動けずにいた。

こいつが死にかかっている。待ちに待ったこの瞬間が今まさに目の前にある。

リズリー氏の血の気のない細い手が私の足の下にある椅子の脚を掴んだ。彼の蒼白の唇から、今にも消えかかりそうな声が漏れ出た。

「助けてくれ……頼む、ロバート……医者を呼んでくれ……」

驚愕の代わりに怒りが沸き上がったのは、この瞬間だった。

「助けてくれだと？」

唇から低い声が漏れ出た。自分でのこんな声が出るのか、と怒りながらもどこか呑気に思った。

「助けてくれって？　てめえ、イーサンのことを忘れたか？　あの子がてめえに何度助けてくれって言ったか忘れたか？　何度やめてくれって言ったか忘れたか!?」

「そう言っていたのか……」

リズリー氏の頬に涙が流れた。びっくり

するほど透き通った涙だった。
「あの子はやめたかったんだな……。私とお前と一緒だ……。すまなかったと思っているよ……お前たちにも、そして何より自分自身に……」
私に見降ろされながら、ゴキブリのようにうずくまるリズリー氏は、嫌悪を誘うほど惨めだった。欲の向くまま、じゃらじゃら貴金属を鳴らし、高級車を乗り回し、貧民を踏みつけ、女や少年を掻き抱く、そんな男がかくまで惨めになるとは夢にも思わなかった。
「死ね」
私は冷ややかに言った。それでも声は震えていた。目の前の惨めなリズリー、そして脳裏に同じくらい惨めな目にあったイーサンが入り混じった。
（死ね！　死ね！　死ね！　死んでしまえ！）
怒りというより恐怖に近かった。私は何かを振り払うように胸の中で叫び続けた。まるでカルトの呪いの儀式のように。
（お前なんか死んでしまえ！　いない方がいい！　くたばれ人でなし！）
リズリー氏が短い悲鳴を上げて、上体を蛇のように反らした。やがて体を大きくしならせ、床の上にバタンと倒れた。
「お前も……いつかは分かるようになる……」
それが彼の最後の言葉だった。
リズリーが死んだ。願いが叶った。次の支配者はこの俺だ。
私は興奮のあまり椅子から転げ落ちた。足首に激痛が走ったが構わず立ち上がって扉を勢いよく開けた。
「誰か！」
廊下に向かって叫んだ。丁度夜勤のメイドが洗濯物を運んでいた。私は彼女を怒鳴りつけた。
「早く！　早く人を呼んでくれ！　旦那様が大変なんだ！　助けてくれ！」
彼女は冷静にうなずくと、すぐに駆けていった。女中の足音が遠のいても私は一人で叫び続けた。
「誰か！　誰か来て！　早くこっちに来て！　お願い助けて！」
涙が自然にぼろぼろと溢れた。いざリズリーが死んだ時いつでも泣けるようにと目薬をポケットに入れていたのだが、結局使わずじまいになった。私は本当に泣いた。演技では決してなかった。自分の心のままに私は泣いた。
優秀なメイドは医者やらその他の手下連中やらを伴って、二十分もたたないうちに戻ってきた。
「心筋梗塞ですな。短いうちに亡くなられたようです」
医者はリズリー氏の手首やら胸やらを触ってそういった。部屋に入ってきた時、私に向けられていた疑惑の視線はすっと消えていった。いくらなんでも人の心臓まで好き勝手にできるのは呪術師くらいだろう。
人々がため息をつきながら何やらざわざわと話し込む中、私はまだわんわん泣いていた。誰も私に話しかけなかった。
一つだけ、小さな手が方にそっと乗せられた。イーサンが奥深い黒い瞳でそこにいた。私は三歳児レベルの欲望が彼に向かっ

て流れだすのを感じた。私はそれを、いつの間にか広くなった彼の胸にすがりつくことで満たした。

リズリー氏の葬儀は、パトリックの父親が牧師を務める教会で行われた。この教会は、この町のあらゆる階層の者を受け入れてきた。シヴァ街の豪商の豪華な結婚式も、ヴィシュヌ街の人々の慎ましい葬式もやる。裏の墓地にはブラフマー街で死んだ名もない人々の骨ができる限り集められ、暖かい土の中ですやすや眠っている。

式の途中、父の助手をするパトリックと目が合った。彼は文句なく美しかった。

葬儀の後、男達は食堂に集まった。喪服姿の男達が頬を紅潮させて座る中、私とイーサンは壁際に立たされていた。痛む足を交互に動かしながらテーブルを見ると、そこにはジェフェリーが座っていた。彼の周りでさかんに話されるのは、もちろん次代のトップについてだ。普段は落ち着いたジェフェリーも、この日ばかりはやたらと水差しの水を煽っていた。

しかし、もう手回しは済んでいるのだ。今椅子に座る男の誰一人、名前を呼ばれることはない。そう思うと、何も知らないジェフェリーに少し申し訳なかった。

やがて、弁護士が盆の上にリズリー氏の遺言書を乗せて入ってきた。私はひっそり閉じていた瞳を開けて弁護士の顔を見た。そして絶句した。

（あいつじゃない！）

私が誑し込んで遺言書を偽造させたあの弁護士ではなかった。本物だ。彼が手に取った書類も私の用意したものではない。本物のリズリー氏の遺言書だ。いつの間に用意したんだろう。

（ああ終わりだ。何もかも終わった）

私はずるりと床の上にへたり込んだ。どうやら私はリズリー氏をいろいろと勘違いしていたらしい。彼の考えも、心の中で思っていたことも、大して分かってなどいなかった。

「ミスター・アーノルド・リズリーのご遺言により、次代のヴァルナ社の社長を発表させていただきます」

弁護士の言葉には、一片の人の心も含んでいないように思えた。私は覚悟して瞳をきつく閉じた。

このようにしっかり覚悟を決めておいたからこそ、弁護士の次の言葉を聞いた時、反動でこむら返りを起こしそうになったのだ。

「ミスター・ロバート・クロス」

彼のひんやりした声が言った。

「ミスター・リズリーはあなたを後継者に指名いたしました」

食堂の中がしんとした。私は瞼と口を数回開閉させただけだった。

手回しなどいらぬことだった。すでに自分が社長だと決まっていたのだ。だけどそんなこと思いもよらなかった。あの人ならば、あの人なら絶対に私なんか選ばないと思っていた。もし私が彼ならば、絶対に私なんか選ばない。そのはずだった。自分の中ではそうだった。でも、あの人は全く別

の人だった。
私が呆気に取られている中、弁護士の急いた声が再び食堂に響き渡った。
「ミスター・クロス。お受けいただけるなら前に出て皆様にご挨拶を」
私ははっとして床から立ち上がった。おろおろとして顔をあちらこちらに向けた。
席に座した男達がみんな揃って静かに私を見つめていた。彼らは皆、知も力も優れた男達で、我こそは我こそはと常日頃思っていた人達だった。それが、卑しい若造に夢を打ち砕かれたのだ。それなのに彼らは静かだった。野次の一つも飛ばさず、じっと私を見つめていた。
もう怖がってはいられない。そんな場所まで来てしまった。
「お受けします」
私は冬のつむじ風のような声で答えた。そして食堂の長机の前まで歩き、頭をそびえたたせて全員を見下ろした。
「この瞬間から、この私ロバート・クロスがヴァルナ社、そして君達の長である。古い時代を忘れ、この私をすべての頭とするよう、皆一同心を揃えるように」
乾いた拍手が波のようにうねり響いた。男達の顔の中に、イーサンの遠いシルエットを見つけた。彼は両手を胸元まで上げて止まっていた。

二十年。たった二十年だった。貧しいどん底の暮らしに生まれ、笑い、泣き、怒り、恋をして遊んで苦しんで、そしてただ一人の支配者となった。二十年、それにたった二十年だ。一瞬のできごとだった。考える暇もなかった。

社長に就任した夜、私はかつてリズリー氏が使っていた。歴代トップの寝室に体を移した。リズリー氏はいつも私の部屋を訪れるだけだったので、私は今まで支配者の寝床というものを知らなかった。きっと奢侈に奢侈を重ねたぎんぎらぎんな部屋なんだろう、と内心ビクビクした。ところが、寝室は拍子抜けするほど簡素なものだった。面積こそ広いが、家具などまあこれは要るだろう、という物が取り付けられているだけで、細かい透かし彫りも花も、ビロードのカーテンも、ブルーの壁紙も、伽羅の匂いも何もなかった。前に使っていた部屋の方が豪華だといえた。
ベッドに寝転ぶと、天蓋がない分すべてが広く大きく見えた。
アン。君の小さな坊やはとうとう街の支配者になったよ。
まさしく誰もが羨む人生だ。彼女はそんな人生を達成した男に愛されているのだ。寝返りを打ちながらそんなことを思ったり、呼びかけたりした。これから猛スピードでやらなければならないことがたくさんある。それが落ち着いたら彼女にまた会いに行こう。
その時、ふとベッドのサイドテーブルの引き出しが目に留まった。何気なしに開いてみると、そこには香水瓶やチョコレートの小箱に囲まれるように、古いノートが一冊入っていた。何度も読み返したのか、背表紙はよれよれだった。

ノートを開くと、美しい、だがまだ努力の跡が見える若い文字が目に入った。
「人の上に立つならば」
そう文字にあった。
「日頃感謝を忘れないこと。そして恐怖で人を支配しないこと。自分の限界をよくわかっておくこと。なんでも協力すること。自分自身を好きになること。なりたい自分を忘れないこと」
それを読んで、嫌な気持ちになった。背中がぞくりと震えた。心の奥底を急にさらけ出された気がした。

あれはきっとリズリー氏の書いたものだ。昔は分からなかったことが、今ならわかる。あのノートを思い出して、なぜあの人が私を後継者に指名したのかも分かった。
あの人はやっぱり私が嫌いだった。そして何より自分が嫌いだった。だから私を社長にした。

数々の夜会やら茶会やらで多くの人々と新しい名刺と握手を交わし、それが一段落すると、私はさっそく会社をクロス式に変え始めた。
まずは戦争を利用するところから始める。とうとう世界と向き合う、グローバリゼーションの始まりだ。そのために必要なのは言語だ。外国語ができる人間をこちら側に引き入れなければならない。そして都合のいいことにこの国は人種の坩堝なのだ。
「本日より、非ワスプの正社員登用を開始する」
私は会議室の首席に座って言った。
「どの国の出身か、信仰する宗教が何かは一切問わない。もし実力があるのなら、女を登用することも可能とする」
部下達がざわざわと騒ぎ立てた。彼らは水揚げされた深海魚のような顔をお互いに向き合わせ、やがて口々に捲し立てた。
「あんまりです、旦那様！　今までの体制を変えるのはリスクが大きすぎます！」
「文化も何もかも違う連中とうまくやっていけるとは思えません！」
「我々は今までのやり方で何十年もやってきたんだ！　たった数年しかここにいなかった貴方に何が分かるのですか！」
あまりの反対意見の多さに、私は一瞬怯んだ。しかしこういう反発などこれから何度も、もっと激しくされていく。これくらいで、物怖じしてどうするんだ。
「やかましい!!」
柳腰からはとても想像できないほど野太い声で私は怒鳴った。
「何がリスクだ、何が今までのやり方だ！　いつまでもそうやって生温い考え方でいるから一向にこの会社は前進しないんじゃないのか、ええ!?　貴様らは自分で勝ち取った訳でもない地位に胡坐をかいて、百万ドルの価値を持つ黒人が通り過ぎるのをぼけっと見ている方がいいというんだな!?　馬鹿馬鹿しい！」
そして、最後の留めにギロリと周囲を睨みまわした。
「貴様らは就任式で私に誓ったことを忘

れたか？　今貴様らの頭はこの私だ。決定権を持つのは私だ。ここにいる限り、私の言うことは絶対だ。もしも、私の言うことが聞けないというなら、もうヴァルナ社には必要ない。今すぐここから立ち去るがいい！」

怒鳴り声の後、痛いほど身に染みわたる沈黙が流れた。やがて椅子の脚が床を削る音が鳴り響いた。一人、また一人。男達が立ち上がって部屋の扉から消えていった。怒りの表情はなく、「やはりダメだったか」というような顔で。

ほとんどが出て行った。ガランとした会議室に、私のつま先が床にあたるカツカツという音が大きく響いた。

（どいつもこいつも分かってねえ）

そう思った時、机の端から声がした。

「いくら何でも言いすぎですよ、旦那様」

知っている声だった。何度も私を怒鳴りつけていた声だった。

「ジェフェリー……」

昔は上司だった人が、今では部下となって残っていた。

「旦那様。確かに彼らは頭の固い時代遅れな連中ではありますが、それでも彼らなりの道理は持っていますよ。それを頭ごなしに貶しては、誰もついてはいきません。相手の心を変えたいなら、まずは相手をよく理解しなければ」

「なぜ貴方は出ていかない」

私は、少し拗ねたような声で言った。

「こんな生まれの卑しい若造の部下になって、自分が情けないとは思わないか？　私なら耐えられない。今までは下だった人間に命令されるなど」

「私は構いません。ここは給料がいいですからね」

ジェフェリーは優しく笑って言った。

「私はこの先行き危ういアメリカで、一人息子を大学にやって、妻に好きなだけお菓子を作ってほしいのです。妻と息子のためなら、バスタブでぎゃあぎゃあ喚いていたクソガキにへこへこ頭を下げることぐらいどうってことありません」

「すごいな」

嫌味ではない、素直なため息が出た。なんと立派な人物なのだろう、と。

「貴方がいれば何でもできる気がする」

「度が過ぎたことはよしてくださいね。しかし、グローバリゼーション、私は賛成ですよ、旦那様」

固い握手が交わされた。

イーサンの他に、また一人信頼のおける仲間ができた。さあ、それをどんどん増やさなければならない。

「ヴァルナ社は、人種、宗教に関わらず全ての人間に正社員登用の機械を与える。どなたでも志願すること」

この広告は効果抜群だった。半数以上の人々がヴァルナ社から出て行ったが、それを遥かに凌駕する人数が面接に押し掛けた。たまたま面接の様子を除きに来たイーサンが、

「すごいな。廊下がまるでカラフルタイルみたいだ」

と呟くほどだった。

真っ直ぐ積み上げればエッフェル塔ほ

どはあろうかとも思われる書類に埋もれ、苦心しながら、私はある二人を一番最初に選抜した。

マッテオ・ラモリーノと中島昌義の二人だ。マッテオはウェーブした金髪の優男風のイタリア人、昌義は小柄で桃の実のようにかわいい顔をした日本人青年だった。

この、入社するにはあまりに若い十八歳の二人を採用したのは、三菱やオート・メラーラとの取引などとは無縁の理由からだった。ただ、いきなりヴァルナ社のナンバーツーという地位にまで押し上げられ、困惑するイーサンに年の近い仲間を作ってあげたい、という思いからだった。二人はさっそく護衛部隊に配属になり、イーサンと上手く馴染んだ。専ら武術面でのみ役に立ってもらおうと思っていた二人だったが、バイリンガルという長所も持っていたおかげで、私は二人を通して二つの言葉を聞くことができた。

私はジェフェリーの助けを借りながら人材登用に力を注ぎ、二か月ほどでほとんどの社員を決定した。中国人、朝鮮人、ドイツ人にフランス人。広告した通り人種を問わなかったおかげで、オフィスがそっくりそのまま人種のサラダボウルだった。

戦に勝つには情報。情報を手に入れるには言葉。私はようやく世界に立ち向かう強力な武器を手に入れたのだ。

私が本格的に戦争に関わる前に、ヴァイオレット・ディケンズとヴァレリア・デュヴィーヌの話をしておこうか。

彼女らに初めて会ったのは、人材登用の件が一段落したころだった。ある日、ジェフェリーが私とイーサンの元へやってきてこう言った。

「公式愛妾を設けていただきます」

私は紅茶を飲んでいた手を止めて上目遣いにジェフェリーを睨んだ。

「何だって？」

「女の愛人を作っていただくのです、旦那様、若旦那様。ヴァルナ社のトップは代々『鹿の園』という娼館の遊女を愛人に持つ伝統があります。それに従っていただきたいのです」

「いらん、女の愛人なんざ。伝統などヤギにでも食わせればいい」

「この町の支配者ともあろう人が男相手に足を開くことでしか夜を過ごせないと思われてもよいのですか」

この男、言い方が一々偉そうなくせに中身はもっともだから本当に腹が立つ。

しかし。私の女性はもう決まっている。いくらジェフェリーが正しくともこれだけは曲げられない。

「嫌だからな、私は……だって、その……」

好きな人がいるから、と続けようとしたが、なんだか急に恥ずかしくなって黙り込んだ。そのド素人丸出しの顔を見て、ジェフェリーの眉が吊り上がった。

「あのね、あなたは人を圧倒する存在でなくてはいけないのですよ！　いつまでも色白のかわいいお人形さんじゃダメなんです！　美女の一人くらい引き連れて胸を張っていなくては箔がつきませんよ！」

「ええ、だって……」

「だっても何もありませんよ！」

反論を考えれば考えるほどジェフェリーが正しくなる事態に私は頭を抱えた。ふと、その時イーサンがぽろりと呟いた。
「嘘をつけばいいんじゃない？」
「どういうことです？　若旦那様」
ジェフェリーの問いに、イーサンが声を大きくした。
「だって見栄を張るために女の人を愛人にするんでしょう？　だったら無理に体の関係を持たなくても、ただ仲良くなるだけでいいんじゃない？　周りにはしっかりした愛人だって言えばいいだけだもん」
「ああ、なるほどね」
ジェフェリーと私の声が重なった。
「まあ、それなら。では、旦那様。とりあえず『鹿の園』にはおいでになれますね」
私は黙って頷いた。

私はジェフェリーとイーサン、そして昌義とマッテオを引き連れ、こわごわと鹿の園の門をくぐった。
娼館があんなにきれいなところだとは思わなかった。私が知っている娼館は、木造屋根とギシギシなるベッドがある所だから、あんな風にお酒を嗜む広い煌びやかなホールが出迎えてくれる所は、未知の領域だった。
私にアテンドされたのは、リズリー氏の愛妾を務めたヴァイオレット・ディケンズだった。異論なく美しい女性だった。あまりにも美しすぎるおかげで劣情など欠片も起こらなかった。荒々しい男の自我など一打ちで粉々にしていた。
「あなたがミスター・クロスでいらっしゃる？　初めまして。噂には聞いておりましたが、言葉に勝るほどお美しい方だこと」
そういって差し出された手を、私はカチンコチンになりながら手に取って甲に接吻した。
その様子を見たジェフェリーが安心したように頷くと、息子への手土産なのか卓上のチョコレートをポケットにねじ込み、さっさか帰っていった。なるほど、やつは家庭のために働く男である。
ジェフェリーが帰った後、女好きのマッテオはさっそく煌びやかなドレスの大海に投身自殺を図り、昌義はその童顔を女たちにかわいい、かわいいと持て囃されていた。
私とイーサンとヴァイオレットはカーテンに阻まれたソファ席でワインを嗜んだ。私は緊張で、普段は大嫌いなワインの苦い味も気に留めないほどだった。ヴァイオレットは快活に飲み続けた。しかし、やがてグラスを音高くも品よく置いて、私に艶っぽい微笑を向けた。
「そろそろお部屋で休みませんこと？　ミスター・クロス」
私は緊張で先ほど飲んだワインが器官を逆流するかのように感じた。とは言え、彼女には一対一できちんと話さなければならない。
私が首を縦に動かすのを見て、ヴァイオレットはさっそく腕を絡ませにかかった。が、何を思ったか体を制止させてイーサンの方を見た。
「あら、いけない！　ミスター・カーター、どなたか気に入った子は見つけられて？」

イーサンは不器用に首を振った。私は緊張のあまり彼をすっかりほったらかしにしていたことを後悔した。
「まあまあ、それはよろしくないわ。ごめんなさいね、気づかなくって。あなた、年はいくつですの？」
「十四です、ミス・ディケンズ」
「あら！　じゃあまだ子供じゃありませんの！　それじゃ、お相手が変わってきますわね」
ヴァイオレットがカーテンを押し分けて顔を外のホールに向かって突き出した。
「ヴァレリア！　ちょっとこっちにいらっしゃい！　任せたい人がいるから！」
すぐにカーテンが押し分けられ、一人の少女が姿を見せた。まだ年若く、麗しい娘だった。黒髪のヴァイオレットと対をなす金髪にピンクのバラのつぼみを飾り、白いドレスが紺色のカーテンに際立っていた。
「さあさ、ミスター・カーター。この子はヴァレリア・デュヴィーヌ。フランス出身であなたと同じ十四歳よ。どう？　美しいでしょう？」
イーサンは顔を赤くして頷いた。何しろ、拳と大股と「このバカ垂れ！」という罵声が似つかわしい……例えばミリーのような女とは違う、ピンクが似合う女の子に出会ったのはこれが初めてなのだから。
「だけど、守っていただきたいことがあるわ」
ヴァイオレットの声が突然厳しくなった。
「うちのお店では、十六歳より下の女の子はお客と床を共にしてはいけないことになっているの。この決まりはしっかり心に留めておくこと。だから今夜は二人でお菓子でも食べながら遊んで、夜は別々に寝るのですよ。それにもし決まりがなくったって二人とも若いんだから、何か間違いがあると大変ですものね。さ、ヴァレリア。きちんとお願いしますよ」
「はい、お姉さま」
ヴァレリアが赤い顔のまま優雅にお辞儀をした。私はヴァイオレットの心遣いに深く感謝した。男を跳ね除けるほどの美しさを持つ彼女を買う人々の気持ちが分かった。
私とヴァイオレットは連れ立って席を立った。肩越しに振り向くと、イーサンがぎこちなくも優しくヴァレリアに微笑みかけるのが見えた。

ヴァイオレットの部屋は、いつかリズリー氏が頻繁に訪れた私の部屋に似ていた。青い壁紙、金模様、立ち込める香。
彼女は私に、老人相手にするように触れ、寝台の上に座らせた。そして私の前に直立すると、背中の胡桃ボタンを外し始めた。透けているようで体の見えないドレスが、彼女の腕に合わせて崩れていった。やがて、固い下着が外され、白い見事な裸体が現れた。ヴァイオレットの体は無地のドレスに際立ち、気高く、美しく、そしてどこか雄々しかった。あまりの見事さに、体のどこもうずかなかった。
「さあ、ロバート。女性とこういうことは初めてかしら？　何も怖がることはありませんからね」

私はふう、とため息を吐いたヴァイオレットの史郎肌にはそばかす一つ見当たらない。
「なにか着てください、ミス・ディケンズ。私は、その、そういうつもりじゃなくて……」
「あらあら、やっぱり緊張なさってるのね。大丈夫ですよ、私に任せてくだされば」
「そういうことじゃないんです」
私の強い口調に、ヴァイオレットは笑顔を消した。彼女はしばらく黙り込んだ後、つかつかと寝台の脇により、強い匂いを放つ香炉の火をふっと消した。
「ああ、臭いったらありゃしない」
そしてまたつかつかと衣裳箪笥の前まで歩くと、中から取り出したバスローブをするすると身に纏い出した。
怒らせたかもしれない、と私は冷や汗をかいた。どうしよう、あんなに親切にしてもらったのに。
「ミスター・クロス」
と、彼女の固い声が頭上から降った。私の肩がふと強張った。
「好きな人がいるなら、ちゃんとはっきり言わなきゃだめでしょう？」
私が間抜けな声を上げるまで、しばしの沈黙があった。
「ええ!?」
「なんで分かったか、と聞きたいところでしょうかね」
ヴァイオレットが快活な、それでいてどこか下世話な風味のある笑い声をあげた。先ほどの天女のような姿とは打って変わって。
「全くあんたすぐに顔に出るのよ！　あたし、一目で分かったわ！　これは好きな女に操を立ててる純情童貞の顔だってね！」
私は恥ずかしさのあまり顔を両手で覆った。イーサン以外には打ち明けたことのないこの秘密を、彼女は一瞬で暴いてしまったのだ。そんなに分かりやすいのか、俺は。
「ああ、いいよ、いいよ恥ずかしがらなくて！　いいことじゃないの、感心するわよ！　大丈夫、応援するわ、あたし！　こういう客は新鮮でいいねえ！」
ヴァイオレットは快活な笑い声をあげながら、寝台にドカッと豪快に座った。
「私はね、お客が求めることは何でもしますわ。だから、あなたが私に表向きの愛人を演じろというのなら、完璧にこなしますとも」
「いいのでしょうか？」
私は戸惑いを飲み込んでヴァイオレットを上目遣いに見た。
「そこまでお気遣いいただいて、こちらも気が引けます。ネオンライトタウン一の女性に振りを頼むなんて……」
「じゃあ、あんた、あたしと寝てその女の人を傷つけたいの？」
「まさか！　それだけはできません！」
「じゃあ、いいじゃないの。あたしたちの仕事はお客様を笑顔にすることだもの。振りだって仕事のうちよ」
私は居住まいを正して彼女に深く頭を下げた。
「ありがとう、ヴァイオレット。だけど、あなたの顔に泥を塗らぬよう、ここにはい

つも訪れるようにします。そしてきちんと揚げ代もお支払いしますし、贈り物もします。優しい心には、こちらも誠意を持って報います」
「まあ、いい子なのね、あなた」
「ヴァルナ社の社長がいい子っていうのはちょっと……どうなんだろう」
「何言ってるのよ、誰にでも透明な部分の一つくらいあるわよ」
ヴァイオレットは笑って私の顔を覗き込んだ。
「あなたの女の人は、幸福な方ね」

舞踏会や晩餐会の会場で、私は噂の中でのみ男になった。それもこれも、ジェフェリーとヴァイオレットが懸命に流してくれた、ありがたい嘘八百のおかげだった。人々は、昔のように私に人形を可愛がるような視線を送らなくなった。私はこっそり、身長が高く見えるよう靴底に細工をした。
イーサンとヴァレリアは上手くいっているようだった。お互いがお互いの美しさに惹きつけられ、十六を超せば二人とも何の不安もなく勤めを果たせるだろう。しかし、二人の関係が恋に発展するには、イーサンは知らなすぎ、ヴァレリアは知りすぎだった。
トップに必要な愛人、まあ私にとってはミリー的な友達なのだが、そういった女性達は手に入れた。私はいよいよ完璧な権力者へと近づいて行った。
だが、アレック、ジョン、パトリックの三人との交流は途切れずに続いた。私が社長、最高権力者になったと知っても、彼らにとって私はずっと友達だった。権力者の友人に見合う地位や金を要求してくることも一切なかった。
ただ、パトリックだけは不安そうな表情を微笑した唇の端にそっと乗せるようになった。
ある日、私は彼らと共に私室で一杯引っかけながら、酔いどれの唇で私とイーサンに愛人ができたことを言った。すると、ジョンが大仰な仕草で天を仰ぎ、
「おお、主よ！　あのおちびのイーサンがもう童貞卒業の道を開いたのに、なぜ私にはその道をお示しくださらないのでしょう！」
と、喚いた。まるでオイディプス王の大袈裟な嘆き方に、私達はげらげら笑った。一際大きく笑っていたのはアレックだった。そして一九一九年の十一月、その意味に気づいた。

一九一五年、クリスマスには終わると歌われていた戦争は、とうとう膠着状態に陥った。西部戦線では第二次シャンパーニュ会戦や第三次アルトワ会戦で幾万もの兵士が死に、大量の物資を失うこととなった。何よりも重要だったのは、ドイツ軍による無制限潜水艦作戦だろう。潜水艦ユーボートに沈められた、ルシタニア号を覚えているか？　そう、あのイギリスの客船だ。乗船していた百二八人のアメリカ人が死んだ。中立国の人民が理不尽に殺害されたあの事件は、国中の参戦意欲を盛大に煽った。

あの百二十八人にはすまないが、彼らの死は私にとっては幸運だった。連盟国への燃え上がる人々の憎悪は、商人や職人にもっと武器を作らせた。つまり、私の仕事がやりやすくなったというわけだ。

私はさっそく町中の鉄工場と取引し、彼らに賃金も惜しまず鉄を加工させ、その合計高を何度も確認した。そして移民の従業員らと共に、フランス、イギリスやらに連絡を取り、加工済みの鉄をニュージャージーの港に送った。それを繰り返す度に、ヴァルナ社の口座は黄金に輝いた。私から贈られる鉄を、「汚らわしい」と言って跳ね除ける者はいなかった。彼らにとって大切なのは、死なないことと勝利、これだけだったのだから。

とはいえ、私は母国では大量に敵を作った。限りある物資を取り合う中、何度銃を向けられ、ナイフを忍ばされ、夜会の食事に毒を盛られたことか。一度そういった不届きを行った者の所には、イーサンや昌義やマッテオを送り込んだ。彼らの活躍で、楠間に乗る時でさえスーツの下に鍋蓋を仕込ませる生活とはおさらばだった。

鉄の栄華を極めるまで、社長就任からあっという間だった。ところがどっこい、人生はそううまくいかない。栄華があっという間なら、その衰退の始まりもまたあっという間に始まったのだ。

我らがヴァルナ社に立ちはだかったのは、あのUSスチールだった。近場の鉄工場では心もとなし、とネオンライトタウンやシカゴの外まで手を伸ばしてみたが、そこはすでにカーネギーの一派、USスチールの領地だった。私はすっかり頭を抱えた。いくらヴァルナ社が悪名高くても、国内の半分以上の鉄を所有するUSスチールの喧嘩を売ることはできない。とは言え、ミシガン湖のみに物資を求めていたらいずれ限界が来る。そうすれば、また少数派マフィア相手にちんたら商売する日々だ。大量に雇った従業員をどうすればいい。絶賛リストラ祭り待ったなしだ。

頼みの鉄にも限界が来たと分かると、あとは眠れない日々が続いた。そんな不安な毎日を打ち消したのは、四月二十二日の第二次イーペル会戦だった。

鬱々とした気持ちである夜、イーサンの部屋を訪れた。「たまには一緒の部屋で寝ないか？　昔みたいにさ」と言って、扉を開けると、彼はちょうど古新聞を敷き詰めた机の上で、小さな手作りのペンダントに塗装を施している最中だった。

「ヴァレリアに？」

イーサンは無言で頷いた。私は彼の豊かな波打つ黒髪にキスし、「そろそろ寝ないか？」と言った。イーサン・カーターは完璧に私を無視して作業を続けた。最近彼はずっとこんな態度である。私は嘆息してぼんやりとパレットの下の古新聞を見つめた。四月二十三日のものだ。第二次イーペル会戦の様子が書かれている。ドイツ、フランス、死者数、マスク、毒ガス。

（毒ガス！）

突如飛び込んできたその文字に私を目をしばたたかせ、急いでパレットを押しのけて新聞を取り上げた。イーサンが下から

睨みつけるのも構わず、私は紙切れに食い入った。
「そうだ！　マシンガンやらタンクやらだけじゃない！　毒ガスだって立派な武器じゃないか！」
　私の薄青い顔が向日葵のように咲くのを、イーサンがじっと見つめた。
「卑怯だよ」
　彼が一言言った。
「ああ、子供だな、やっぱりお前は！」
　私はイーサンの肩を抱いて大声で言った。
「いいかい、イーサン！　消費者の求めてるものってものを考えなきゃ商売はできない！　あの人たちはね、じゃんじゃん殺したい、それだけなんだ！　馬上槍試合で勝ちたいなんて人いないよ！　効率的に殺せる毒ガスはまさに打ってつけなんだ！　やれるなら簡単に殺せ、殺せってね！」
　イーサンは肩に絡みついた私の手をそっと払いのけた。

　毒ガスの製作にはほとんどが賛成した。そもそもマフィアと癒着があるヴァルナ社は麻薬の製作も行っていたので、薬学に関しては強いのだ。
　と、言いたいところだが。ここで私の最悪のやらかしが発覚した。元からヴァルナ社に所属していた優秀な製薬部の人材が、例の私の喧嘩売りのせいで出て行ってしまったのだ。新しく登用した人材は、何より語学や腕の高さを第一に見たので、薬や毒に詳しい者などゼロだった。つまるところ、現在のヴァルナ社の製薬部はもぬけの殻なのだ。
「どうしたものですかね」
　ジェフェリーはたて続けにコーヒーをあおりながら、額に皺を寄せていた。
「新しい人材を探すにしても、そうそう毒に詳しい人はいませんからね。相当な高学歴、大卒を見つけてこなければ」
「うちで大学まで出た人っているんですかね？」
「いることにはいるが、薬学となると完全なインテリの分野だからな」
　マッテオの質問に、ジェフェリーが答えた。つまり、市立図書館にすっぽり収まる程度の知識を知ったかぶりするような半端ものではいけないというわけだ。選び抜くならプロ、本物のインテリゲンチャでなくては。
「難儀しそうだな。私は低学歴どころか学歴自体がないし、大学にも詳しくない」
「僕も尋常六年までですよ。でも、旦那様はジェフェリー・ボールドウィン大学を卒業なさってる。引け目を感じることありませんよ」
　昌義の冗談に、片頬が緩んだ。
「やるしかないな」

　私はさっそくネオンライトタウン近辺の製薬会社を片っ端から調べにかかった。その中で目に留まったのが、ロレンス・エベレット。ハーバード大学の薬学部を現役で卒業し、今では数々の有力な製薬会社を経営、自ら開発の指揮を執ることもあると

いう。しかも大学時代にドイツへ留学、毒ガスの開発者でもあるフリッツ・ハーバー博士に学んだ、という、無学な私でもさすがに分かる素晴らしい学歴の持ち主だ。
　私は舌なめずりしながら履歴書に鉛筆で印をつけ、マッテオを呼んだ。
「決めた。こいつにする」
「ハーバードですか。相当頭のいい人なんでしょうね。うわ、浪人も留年もなしか」
「ふん、大学生など親の金に物を言わせているという輩も少なくないがな。その点を抜けばジェフェリーの方がよっぽど賢い」
　皮肉な笑いが、しかし、ふと緩んでしまった。
「でもどんな人だろうね。ハーバードで勉強できる人って」
「気になりますね。旦那様。私が何とか伝手を探すので、その間絶対チョコを食べ過ぎないでくださいね」
　マッテオは三日のうちにロレンス・エベレットが出席する夜会の情報を鹿の園から持ち帰った。私はヴァイオレットのコネを使って、その夜会の招待状をゲットした。

　何かしらの会社だったか人だったかの生誕を祝うパーティーで、私はロレンス・エベレット、そして思いもよらないあの人と出会った。
　私は男の部下のみを伴って、参戦した。当然ヴァイオレットはなしである。そして給仕の少年からシャンパンを受け取りながらロレンス・エベレットに近づいた。
「ロレンス・エベレット様でいらっしゃいますか？」
　私は彼が一人になった瞬間を取り逃がさず、彼に話しかけた。写真よりも遥かに若々しく見えるエベレットの顔が右に六十度傾き、私はその瞬間に上の睫毛の影が優美に影を落とすよう、瞼を動かした。
「え、ええ。失礼ですが、あなたは？」
「お聞き覚えございませんか？　かの悪名高きヴァルナ社の社長、ロバート・クロスと申します」
「ああ。あの……ね」
　エベレットは私から目を背けて、グラスの中身に集中した。
「随分お若いので驚きましたよ。余程優秀なお方なのですね」
「まあ、とんでもございません！　私よりも貴方の方がよっぽど立派な方ですよ！　これほど素晴らしい経歴をお持ちの方など、私、今までお会いしたことがありませんもの！」
「そうですか」
　エベレットは気まずそうな笑みを浮かべた。中々一筋縄ではいかない。なるほど、分かった、こういう堅物には却って褒めれば逆効果だ。私は強行突破に作戦を切り替えた。
「おっと」
　そう思いがけなく、しかし甘やかに言い、私はズボンの裾を踏んだ振りをして体をよろめかせた。
「大丈夫ですか⁉」
　エベレットが慌てて言い、ぐらつく私の腰を片手で支える。よし、チャンスだ！　私はわざとエベレットの胸板にもたれかかり、瞳を瞼越しに上向けた。大抵の男は

これで落ちる。はず！
　エベレットの息が耳たぶに暖かくかかり、私の唇がゆっくりと開く。そして、「ロバート・クロス名句八百集」を甘く囁こうとしたその時だった。
「ロレンス！」
　エベレットのファーストネームが私のではなく、年若い女性の声で呼ばれた。エベレットが咄嗟に私を体から引き離し、それと同時に私の唇からは「クソったれ！」という暴言が漏れ出た。エベレットは私の「クソったれ」など気にも留めていないようだった。彼はただホールの階段の上を見つめていた。
　なんだ、小癪な女め、よくも邪魔しやがったな！
　私はイライラと頭を振って作戦を失敗させた女の姿を仰ぎ見た。広いパーティーホールの二階から伸びた階段の踊り場に、十七歳ほどの年若い令嬢が立っていた。紅茶色の髪を天然石で飾り、白地のドレスを着ている。あまり高価ではなさそうな綿のドレス。そのドレスを、彼女の腰から上へと視線をずらしながら眺め、やがて顔にたどり着き、そして私は驚きのあまり今度は本当にズボンの裾を踏んでよろめきかけた。
（グレース！）
　薄化粧された、白くも意志の強そうな美しい顔。いつかマクファーレン氏の居間に白く清らかだったあの美少女が、さらに美しく成長した大人の姿で私の前に立っていた。
「おお、グレース！」
　エベレットの声にグレースは微笑し、長いドレスの裾をつまみ上げ、細く上品な足首をほんの少し覗かせて階段を降りて来た。エベレットが差し出した手に彼女は掴まり、そして私を見、はっと顔を強張らせた。
「グレース。こちらはミスター・ロバート・クロス。ヴァルナ社の社長様だよ」
「ロレンス」
　私を紹介するエベレットを、彼女は制した。
「私、この方には一度お会いしたことがありますわ」
　厳しい彼女の視線に緊張しながらも、私は何とか会釈を送った。
「お久しぶりです、ミス・マクファーレン。三年ぶりですね。すっかりお美しくなられて驚きました」
「あなたも相変わらずおきれいですこと」
　グレースはエベレットの手を放し、真っ直ぐに私を睨みつけた。
「ロレンスに何の御用ですの？　まさか、また色仕掛けでご自分の配下にしようとお考え？　残念でしたわね、ミスター・クロス。この私の目は誤魔化せませんわよ」
「グレース！　少しは慎まないか！　失礼だろう！」
「いいえ！　この方は最初から大層な目論見があってあなたに近づいたのですわ！　こちらを軽んじる方にはそれ相応のお礼をしませんとね、面と向かって！」
　私はいつにないほど冷や汗をかいた。私を殴ったどんな男よりも彼女の目が怖かった。彼女にだけは、どんな権力も美貌も

使い物にならない。私がどうしたって手に入れられない気品と真っ直ぐな瞳のままで、彼女は美しくなっていた。
「すみません、ミスター・クロス」
と、エベレットが困った顔をして私とグレースの間の緊張を打ちといた。
「彼女はこの通り、実直な女性でしてね。自分の意見ははっきり言うタイプですから、分かってやってください。まあ、とにかくミスター・クロス。あなたが何かお仕事に関する目論見を持って私に近づいたのなら、あなたを受け入れることはできません。しかし、それ以外の他愛ない世間話なら、いつでも致しましょう、ミスター・クロス」
そうにこやかに言い、差し出されたエベレットの手を、私はぎこちなく握った。あまりに気まずい瞬間だった。彼の屈託のない笑顔も、グレースの真っ直ぐな瞳も、私には気まずくてしょうがなかった。しばらく口の中でもごもごと舌を動かした。そうするうちにポツンと疑問に思ったことを何気なしに口にした。
「あの、そういえば、お二人は一体どんなご関係で……」
「ああ！」
グレースが厳しい顔を突然パッと幸福そうに輝かせた。そうすると、彼女は本当に普通の女の子だった。
「ご挨拶が遅れましたわ！　ごめんなさいね、ミスター・クロス！　あのね、私達来年の初夏に結婚しますの！　もう結婚式の準備も、ウエディングドレスの用意も全部済んだのよ！　私、お母様のドレスを着るの！」
「グレース！　急にそんなにはしゃいで、クロスさんが困ってるじゃないか」
「まあ、ロレンス！　私達の結婚は誰に対しても幸せそうに話さなくっちゃ！　ミスター・クロスにだって私達の幸福を知っていただきたいもの！」
私は茫然としてあの気高いグレースが幼女のようにはしゃぐ様を眺めた。顔中の筋肉が引きつり、かすれ声で「おめでとうございます」と一言言ったきりだんまりになってしまった。あれほど意気込んでいたものが、絶望と恐怖でしぼんでいった。
「ロバート。ここにいたの」
突然背後から名前を呼ばれ、振り向くと正装のイーサンが立っていた。社交界に出たばかりの彼の姿が、妙に初々しく可愛らしかった。
「おや！　ミスター・クロス、随分若い方をお連れなのですね！　そちらは弟君ですか？」
エベレットの声に、イーサンは「初めまして。人が多くて参りますね」とだけ答え、やがてグレースの方を見た。グレースは眉根を寄せ首を傾げ、イーサンと見つめあった。
「あら……あなたは……」
「どこかでお会いしませんでしたか？」
イーサンは半ば恐れるような声で聞いた。
「さあ……よく覚えていませんわ……」
グレースが答えた。

あの夜会の後、なんとかエベレットの家

電の番号はゲットできたが、なかなか彼にアクションを起こすことはできなかった。
誰が思うだろうか。若いころ、あれほど心惹かれた少女が、自分の毒牙にかけようとしている男の許嫁だったと。今や私は電話のダイヤル一つ回すだけで彼女の人生をぶち壊せるのだ。壊せる。その「せる」の部分がひどく嫌になった。グレースが泣くかもしれない。自分の指のせいで。グレースが壊れるかもしれない。自分の口のせいで。
「いい加減にしてくださいよ、旦那様」
ジェフェリーがイライラと頭を振りながら仕事部屋の私に言った。彼は毎週金曜、息子に「ごめんよ、ダニー。パパはお仕事が忙しくて今度の日曜も遊園地には行けそうにないんだ」という言い訳をしなければいけないのだ。それもこれも、私が愚図って商売を上がったりにしているせいだ。
「もう鉄だけではほかの企業に勝てないのですよ！　何としてでもエベレットを引き入れなければ！」
「なあ、他の薬屋じゃだめなのか？　ウェベレット以外のさ」
「無理ですよ！　他の薬屋は大手中の大手ぞろい！　ヴァルナ社なんて相手にしませんよ！　やはり若いエベレットでなければ落とせません！」
ジェフェリーの言葉に私はため息をついた。実際に他の製薬会社に手紙を送ったりと一応頑張ってみたのだが、ものの見事に全て無視されたのだ。「世間話ならいつでもしよう」などと言ってくれたのはエベレットくらいだった。
「なるほど、女の人には弱いんですね、旦那様は」
会社のピンチにもかかわらず、マッテオがどこか愉快そうにそう言った。
「男には二つの経験があるけど、旦那様は一つしか豊富じゃないんですものね！　あっと、マサもそうだったかな！」
マッテオがいやらしく言い、昌義の腰を抱き寄せた。たちまち昌義が顔を赤くしたが、マッテオは構わず揶揄い続けた。何でも昌義は夜勤の日、仮眠室でスヤスヤ寝ていた所をマッテオにぺろりと物にされてしまったようだ、とあの頃は噂で……あ、ごめん、忘れてくれ。何でもない。
しばらく二人がいちゃつ……絡み合う様子をぼんやり眺めていたが、ふと「旦那様」と若い女の声が私を呼んだ。厳しい声だった。
「いつまでも甘えたことおっしゃっちゃいけませんわ」
私は眉尻を下げて、デスクに手をついて私を睨むナヒマナをそっと見た。彼女は去年雇ったイーサンの部下で、警護団の中では唯一の女性、そしてネイティブアメリカンの士族の一つ、スー族の出身だった。性格はコヨーテのように荒々しく、あの恐ろしいミリーにさらに狂暴さが加わったと言ったところか、とにかく勇ましいヴァルナ社の男達が震え上がるほど厳しい女だった。実際俺だって怖い。
「その女の方だけが特別扱いだなんて、卑怯にもほどがありますわ！　あなたが今まで寝て来た男達にも奥方やご息女はいらっしゃったはずでしょう？　それがなんです、泣かせるしっかり目に見えた途端

手のひらを反すなんて卑怯にもほどがありますわ！　あなたは普通の地位にいるんじゃありませんのよ！　ここにはね、ありとあらゆる富と権力があるけれど、その代償にとてつもないほどの覚悟が要ります！　代償をきちんと払わない人間に、ここに座る資格はありませんわ！」

ナヒマナの息の粗い言葉は、どんな罵詈雑言よりも鋭かった。口汚い言葉よりも、真実を指す言葉はすさまじいほどの威力を持つ。

お調子者のマッテオでさえ、口を閉じて昌義から体を離した。ナヒマナとジェフェリーの視線が痛かった。イーサンはあの時はいなかった。

そんな苦しい空間の中で、私はふと亡きリズリー氏を思い出した。電話をする彼を見たことがなかった。私の腿を持ち上げていた手は節くれだっていた。思い出して、思い出して、気づけば私は電話のダイヤルを回していた。

「ブランデーでよろしいですか？」

そうエベレットは自室で私に言った。一か月前、テレフォンアポイントメントに成功した私は、比較的安価なスーツでエベレットの部屋を訪れた。案の定質素な部屋で、私は言われた通り世間話を彼とした。

「すみませんね、散らかってて。何しろうちはあまり使用人を置きませんから、掃除も行き届いていなくて。休日は私が箒を取る羽目になってます」

「いいじゃないですか。男でも家事の一つや二つできませんと。私も気になる所はパパっと自分で掃除してしまう性ですから」

にっこり笑って言い、受け取った酒を口にするとなかなかの高級品だった。

「お客さんがいらした時だけは贅沢をするんですよ」

そう明るく言うエベレットを見て、ああ、グレースが愛する人だ、と思った。もう逃げたかった。

「しかし、よく私を上げてくださいましたね。大抵の人は嫌がるのですが」

「ああ、気にしないでください。私もあなたと話したいと思っていたのです」

エベレットがグラスを小卓の上に置いた。にこやかさが抜け、代わりに苦し気に肌を張り詰めさせていた。

「あなたはブラフマー街の出身だとか」

私の隣に彼は腰掛けた。眉尻は下がり、瞼の端も垂れ下がっていた。

「噂で聞きました。幼いころお母様を亡くされて、それからはずっと道で暮らし、幼いイーサン君を育てるために体を売っていた、と。かわいそうに、さぞかしお辛かったでしょう」

冷水を全身に浴びせられたような心地がした。のどに落ちた酒が突然燃え上がった。

「私とグレースは」

私の顔を気にも留めず、エベレットは続ける。

「いつかそんな子供達を救うために孤児院を作りたい、と思っています。だから、あなたのことも他人事に思えないのです。グレースはあんな風に言ったけれど、彼女にだってあなたの苦労は分かっているは

ずです。あなたは冷酷な権力者ではなく、ただの寂しい子供だと。ロバート、もしあなたがもっと遅く生まれていたら、私とグレースが全力で守ってあげたでしょう。ひもじさも辛さも、味わわせなかった。そうすればきっと、あなたも幸せを見つけやすかったでしょうに」

話し終わるか終わらないかの内に、私はエベレットに掴みかかっていた。私の体重に押され、エベレットは長椅子に倒れた。

「何をするんです!?」

そう叫ぶ彼の喉に私の手が素早く伸び、力いっぱい締め上げようと指が上がった。だが結局、エベレットを絞め殺すことはできなかった。私の指は、彼のシャツの襟を掴むだけに留まった。

「ひどいですよ」

涙をこらえてそう言った。

「自分がどれだけ残酷なことを言ったか分かりますか。私の人生を何だと思っているんですか。やりきれませんよ、もう少し遅く生まれていたらなんて。もう少し……ほんのもう少しだなんて。ただそれだけのことで。私は小さいころの自分に何と言ったらいいんですか。これからの人生なんてどうでもいい。もうお前は生まれ方を間違えた。残念だったなってそう言えばいいんですか」

「ロバート……大丈夫かい?」

エベレットは驚きの表情のまま変わらなかった。そうだ、この人は変わらないのだ。生まれた時から変わらない。ネオンライトタウンのトップを見下ろせる人のまま変わらない。

グレース。それは彼女もだ。あの人も変わらない。何かを引き換えに美しくなったことがない。何を差し出したことがあるんだ。私やイーサンや、アンと違って。

いつまでも、いつまでも、何をしたって見下される。どれだけ変わっても私は惨めだ。息を切らして勝ち取った物を、前から持っていたよ、こんなもの、と見せびらかす人が必ず現れる。幼い頃の自分に会いたい。あの、ひたすら上を向いて目を輝かせていた、あの子を抱きしめたい。

「もうお説教はたくさんです」

私は彼の上で身をよじらせた。心苦しく思うこともなかった。

「もっと別なことをしましょうよ」

そう言って私の指は襟からネクタイへと伸び、その結び目に入り込んだ。

「ちょっと! 何をするんですか!」

エベレットが私の腕を掴んで押し戻そうとした。しかし、ビクとも動かない。それを見て、私は下唇を舌で舐めた。私は何の力も入れていないのだから。

エベレットのネクタイのみを解き終え、次は自分のジャケットを脱いだ。

「で、グレースとは何かした?」

床に投げ捨てたジャケットをそのままに、私はシャツを脱ぎながら勝ち誇るように言った。

「やめてくれ! 彼女とは何も!」

必死に頭を振りながら叫ぶエベレットの目の端に、うっすら涙が浮いていた。しかし、頬は異様なほど紅潮し、腰は浮き上がっている。私は自分の勝利を確信した。

「ああ、かわいそう」

そう優しく言った。

「あんな女がフィアンセじゃ、娼館にも行けないでしょ？　それで、貴族の家庭に押し込められて死ぬんだ。他になんにも知らずにね」
　全てを脱いだ私に、エベレットがすぐに顔を背けた。その泣きそうな表情に、私は優しく言った。
「いいんですよ、ロレンス。あなたは十分真面目に生きてきた。少しぐらいの間違い、多めに見てくれるはずですよ」
　彼のシャツのボタンを一つだけ外した。さあ、あとは彼が選ぶだけだ。
「あなたも息苦しいでしょう？　失えない人生というのはね。私には分かります。グレースの手を取りながら、本当は心の中で何を望んでいるのか」
　エベレットは負けた。彼はスカダー氏よりも若く純真で正直者だった。そして私にまで正直に向き合った。だから負けた。自分の心の底まで感じ取らせてしまったのだ。

　帰ったのは夜中だった。当たり前だ。夜明けが来る前にベッドを抜け出して帰った。
　眠りなおす気にはなれず、自分でコーヒーを淹れて、そのまま書斎に向かった。書斎の扉を開けると、なんとイーサンが起きてソファに座っていた。
「何をしてるの、こんな時間に。早く寝なさい」
　私は彼に行ったが、イーサンは聞いていないようだった。
「どこ行ってたの」
　と、それだけ聞いた。
「どこって。俺が出かけたら大抵仕事に決まってるだろ。遊んでる時間なんかないんだから」
「こんな時間まで？」
「こんな時間だからこそだ」
　彼の向かいの椅子に座ってコーヒーを啜った。
「何とかヴァルナ社は安泰だぞ、イーサン。強力な味方を手に入れてきたところだ」
　イーサンは何も答えなかった。読めもしない本をパラパラと捲っていた。
「君は」
　やがてぽつりと言った。
「ミス・マクファーレンのことが好きなの？」
「は？」
　私はイーサンを睨みつけた。
「そんなわけないだろ⁉　適当なこと言うなよ、何も知らないくせに！」
「適当なのかな」
　イーサンは優しい顔をしていた。膝の上に体を横たえてくれそうな優しさだった。
「なら、俺のことは好き？」
「馬鹿だな。お前は俺が育てた子だぞ」
「そう」
　イーサンは触れてこなかった。有難かった。私に触ってほしくなかった。
「俺は自分が嫌い」
　イーサンが言った。
「君を愛してしまう自分が大嫌い」

　人生に分かれ道をいうのはあるんだろ

うか。エベレットの言った通り、生まれる時期が、場所が違えば人生というのはまるっきり変わるものだろうか。そんなものだろうか。

二度人生を生きれるとしたら、二度目に私はイーサンと出会えるだろうか。アンに、グレースに、アレックに。でも、こんな風に、二度目の人生に迷える私は幸福なのだろうか。

俺なんかが。俺なんかが幸せなのだろうか。こんな風に、一刻も早く死んでしまいたい、と思っている俺が。

（続く）